

Title	授業開始前に見られる儀礼的な行為に関する考察
Author(s)	高松, みどり; 谷村, 千絵; 中戸, 義雄
Citation	大阪大学教育学年報. 2003, 8, p. 109-122
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4597
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

授業開始前に見られる儀礼的な行為に関する考察

高松 みどり 谷村 千絵 中戸 義雄

【要旨】

本稿では、文化人類学他から儀礼概念を導入し、それをを用いて教育実践に見られる社会化のプロセスを分析した、ヴルフ (Wulf, Christoph 1944～) の方法を取り上げ、その高等教育分野への適用可能性が検討される。ヴルフの言う儀礼とは、日常的に繰り返される相互行為を指し、共同体形成に欠かさないものであるが、その際の行為の型は決して固定的なものではない。儀礼は、一定の型が場に応じて様々な形で実演されるものであり、儀礼の成功もそのパフォーマンスにかかっているとすら言えるのである。とりわけ、ヴルフは日常生活に見られる移行の段階に着目する。たとえば小学校では、児童は授業時間の前に、遊びグループの一人という状態から授業を受けるクラスメートの一員という状態へと切り替わる必要があるが、彼はその際に引き起こされる小さな「通過儀礼」を観察しようとしている。彼の手法は、我々が普段、意識しないで行う儀礼を意識化させるものであり、教育者がこのような視点に気づくことによって逆に学生の移行をスムーズにする手助けも可能となるように思われる。彼の方法は高等教育分野への適応も可能であり、本研究では実際に大学での調査を試みた。

〔1〕本稿の目的及び問題意識

本稿の目的は、授業が始まる前に見られる学生の姿勢に注目し、ドイツの教育学者ヴルフ (Wulf, Christoph 1944～) による「儀礼」概念を援用することによって、参与観察やアンケート調査を用いて、その集団でのやりとりとそれによって促される社会化の形態を探ることにある。

文化人類学の研究によれば、「儀礼<ritual>」(もともとラテン語、<ritus>) は「秩序だった行為」を表すとは、宗教儀礼に限定されるものではなく、挨拶や食事などの、ごく日常的な行動をも含めたものである。とりわけ集団行為としての儀礼は、それが慣習化され、関与者の身体に内面化されることによって、その社会的な役割やアイデンティティ、集団の一体感の形成に大きな役割を果たしている。

ヴルフは、近年、このような文化人類学における儀礼概念を教育学の分野へ導入し、低学年の子どもの生活場面(小学校・家庭等)に見られる儀礼的な行為について調査分析を行ってきた。彼は儀礼を、「共同体が生じる際に繰り返され、模倣を通して関与者に身体的に伝えられる、相互行為のモデル」と捉える。

この、同じ型が繰り返されるという儀礼の特徴と並んで、彼が注目するのは、儀礼の実演(パフォーマンス)の仕方である¹⁾。彼は儀礼を、一定の型が「場ごとにアレンジ」されながら生み出されるものとして捉える。儀礼の成立がその実演にかかっているというこの特徴を、彼は“performativ”(パフォーマンスに基づいた)と呼び、それを、相互行為が持つ、関与者を「方向づける特性(Verweischarakter)」と規定する。こうして彼は、儀礼の実演が関与者に対して何を期待し、何を促すのかという点に着眼するのである。

こうしてヴルフは、これまで、それぞれの人間形成の場(家庭、小学校、仲間集団、メディア)において、儀礼が社会化にどのように(どの程度)寄与しているのか、ということフィールドワークによって探ってきた。

その際、とりわけ彼が注目するのは、学校に見られる「通過儀礼」²⁾である。広義の通過儀礼は、時間の区切れや場所の移動、社会的地位などの状態の変化(=移行)に伴って引き起こされる。ヴルフもまた、このような意味で「移行」という言葉を用いており、日常生活で意識されないような、より些細な移行に注目している。例えば彼の着目する学校での移行は、制度的でマクロなレベルでの移行(例 入学式や卒業式)を指すのではなく、ミクロなレベルでの移行(例 休憩時間から授業時間へ)を指す。よって本研究でも、大学での授業開始前の移行(通過)段階を中心に、考察を行いたい。

〔2〕 ヴルフの視点とその適用について

考察の際にヴルフが重視する視点には、次のようなものがある。

- ① 「境界性 (リミナリティー)」
- ② 「制度に従う儀礼」と「制度に抵抗する儀礼」
- ③ パフォーマンスの際の衣装としての衣服と、小道具としての小物
- ④ 相互行為がどれだけ密か (身体運動や、発言に着目)
- ⑤ テリトリーの配置、生徒と教師の位置関係、教室内での彼らの動きはどうか
- ⑥ 型の決まった身振り、ミミック (演技)、(美的) 表現の方法にはどのようなものがあるか
- ⑦ 相互行為の体系、場ごとのアレンジ、舞台装置はどのようなものか
- ⑧ 時間的な構成はどうなっているか

以上のようなヴルフの視点を参照しながら、本稿では、多人数の講義形式の授業を受講する大学生を対象として独自の視点を抽出したいと考える。小学校での調査と大学での調査では、対象者や授業の条件が大きく異なることを念頭に置けば、上述の視点すべてが大学での調査に有効かどうかは検討の余地がある。

まず、小学校の授業と大学での授業では人数の規模が異なるので、大学の授業では、仲間グループの細かい会話の内容を記録することは断念せざるを得ない。また、小学校では同じクラスの生徒が授業を受けるが、大学ではその授業を選択する学生のみが集まる。顔なじみのクラスメートの間であれば共同体は生じやすいだろうが、その授業限りの学生間で、仲間グループ以外に共同体が拡大するということはまれかもしれない。よってある行為の型が模倣によって拡大するという形での共同体形成のプロセスを観察できる可能性は高いとはいえない。さらに、小学校ではたいてい、ホームルームの教室で授業を受けるのに対して、大学では授業によって教室が異なっている。この意味では学生は、授業開始前にはすでに、仲間グループの状態から空間的に切り離されている、すなわち、空間的な「分離儀礼」をすませていることになる。これらの理由から上述のヴルフの視点を、たとえば以下のように絞り込む必要がある。

- ① 型の決まった身振り、それに対するアレンジは見られるか (儀礼のパフォーマンスに注目、上述の視点⑥⑦)
- ② 教室内での学生の動きの時間的、空間的な構成について (上述の視点⑤、⑥の一部、⑧)
- ③ 物、衣服について (上述の視点③)
- ④ 儀礼 (化) の持つ意味について
- ⑤ 授業という制度に従う (あるいは抵抗する) ための儀礼 (上述の視点②)

以上の視点に基づいて本稿では、まず、大学における空間的、時間的な移行 (通過) 段階にみられる学生側の儀礼的な行動を観察し、考察する。他方でヴルフの方法に加えて、教育者側の儀礼にも着目するために授業者へもアンケートを行い、授業の始めに、授業者はどのようなスタイルで授業に入っていくのか (どのような儀礼を生み出そうとしているのか) という点について調査する。

〔3〕 調査について

- 1) 調査方法: 授業開始時の参与観察及びビデオ収録 [資料Ⅰ]、授業者へのアンケート [資料Ⅱ]
- 2) 調査対象: 受講生 80 人以上の授業
 <対象授業: 京都女子大学 (授業者: 谷村) 大阪大学 (授業者: 中戸) >
 アンケートについては任意抽出: 国公立14大学、49名
- 3) 調査時期: 2002年4月~6月

〔4〕 参与観察及びビデオ記録の結果について

〔資料 I〕

〔授業開始時にみられる儀礼的な行為〕

2002年4月16日 京都女子大学

時間	受講者の行為	授業者の行為
-5	(大半の学生がすでに着席) ・友人と授業の時間割表を読む ・グループで会話 ・二人の学生(最後列)二人が鞆を机の上に置いて教室を出ていく。(席取り)	・授業者はすでに登場しており、教壇の上で授業の準備
0	・長いチャイム風音楽(1分15秒) 最後列の二人が戻ってきて、上着を脱ぐ。 ・音楽が終わるまでに話しは小さくなり、上着やタオルがたまたま、時間割表が鞆にしまわれ、ルーズリーフや筆記用具が机の上に出される ・授業者の声とともに静粛 ・「こんにちは」と挨拶を返す ・授業者の発言(「肖像権」)を聞いて騒がしくなる。	・「それでは、教育原論の授業を始めます。みなさんこんにちは」 ・ビデオ撮影のお断り (学生を静かにさせるため、大きな声で)「それでー、・・・」 ・コンコンたたいてマイクの調節 ・授業者の声の届かない。 ・マイクの調子が悪く、なお授業者の声が後ろの席まで届かず ・マイクがつかがる
5	・後ろの席の学生3、4人がそれぞれ自分の机の上に鞆を置く ・後ろの席の学生は依然として会話を続け、携帯電話を取り出す。 ・鞆を机の上に置いて、何でも出し入れ自由になっている三人グループ ・授業者の声を聞こうと、ある学生が後ろの戸を閉める	・教職授業の説明

2002年4月23日 大阪大学

時間	受講者の行為	授業者の行為
-5	・グループで会話	・すでに授業者登場 ・お茶を飲む ・上着を脱ぐ、すでに袖まくり ・配布プリントと参考文献を用意 ・腕時計をはずして手に持ちかえる ・授業用のメモを持って教壇に立つ ・腕時計に目をやる
0	・半数以上が着席 ・チャイム(15秒)一ほとんど聞こえない(この間に残り三分の一の学生が着席) ・ジュースの缶を持った2人の学生が入室。一人で座っていた学生が、たまたま隣に座った二人に手を挙げて挨拶。それに対して二人が「おう、君は確かまこっちゃんちに来てた子やな?」と言って話し出す。しばらく話しながら、授業の準備。話題は授業に関する事「レポートとかださなあかんのかなあ」(新たな共同体の形成、授業の準備)	
5	・たまたま同じ列に座った友人の肩をたたいて挨拶 ・「こんにちは」と挨拶を返す ・静粛 ・ルーズリーフやプリントを出す	・教室変更のため、通常よりも授業開始が少し遅れる 「はい、いいですか。はい、こんにちは」 (注目を集めた後、挨拶) ・「この中で教育という漢字知らない子、おれへんな。教育という漢字をでっかく黒板に書いて。でっかくやで。私の顔よりでっかく。」
	・一部、笑い(人数が多すぎて皆が集中できていないため?)	

2002年5月7日 京都女子大学

時間	受講者の行為	授業者の行為
-5	<ul style="list-style-type: none"> 感想用紙を取りに行く5, 6人のグループ 昼食の後かたづけ 感想用紙を取りに行く7, 8人のグループ。グループ内で「友人の用紙を配る」 用紙を取りに行く10人近くのグループ。友人の感想用紙も一緒に取りに行き配る ほとんどのグループが感想用紙をわきに置いて会話を続けるが、感想用紙を読むグループも。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業者の姿は見えない。感想用紙のみが前の机に置かれている。(すでに一度、授業前に感想用紙を取りにくるよう、指示されている) 授業者が現れる 授業の準備 黒板消し洗浄機に触れる。黒板消しの手入れをする
0	<ul style="list-style-type: none"> ほぼ全員が着席しグループで会話 (G.W.の話題) チャイム風の音楽 仲間グループで会話 友人と感想用紙を取りに行く 授業の感想用紙についての会話 静粛 続々と10名ほど感想用紙を取りに行く 3, 4人のグループが入室 	<ul style="list-style-type: none"> 余った感想用紙を集める マイクに触れる 教壇に立つ。手にした配布プリントを整理し、マイクを調節 「こんにちは。教育原論の授業を始めます」と挨拶。『ノートのノート』を取りにくるよう指示
5	<ul style="list-style-type: none"> 二人の学生が遅れてくる 授業者が後ろにプリントを配りに行くと前の席が騒がしくなる 	<ul style="list-style-type: none"> 前の戸を閉める プリント配布 「今来た人もいますねー。前に『ノートのノート』と取りに来てください」 「プリントが三種混雑したら授業を始めます」(行為の表明。パフォーマンス)

2002年5月21日 大阪大学

時間	受講者の行為	授業者の行為
-5	<ul style="list-style-type: none"> 感想用紙を取りに行く(境界の段階、リミナリティー) 他の学生の感想用紙を配る3, 4人のグループができ、他の学生の名前を呼ぶ(→学生自らによる感想用紙の返却、共同体の形成) 入室してきた友人に、自分の座っている場所を指さして教える 入室した友達に、手を挙げて自分の座っている場所を示す 	<ul style="list-style-type: none"> 腕時計を見る 前回提出された感想用紙を机の上に置き、学生に取りにくるよう指示
0	<ul style="list-style-type: none"> 会話、一人で黙って座っている学生も チャイム ほぼ全員が着席、なお会話 「こんにちは」と挨拶を返す 	<ul style="list-style-type: none"> 余った感想用紙を整理 「はい、こんにちは」と挨拶 事務的な連絡 その日の授業に関する説明
5	<ul style="list-style-type: none"> 入室してきた友人に手を振って合図 遅刻した学生が感想用紙を取りにくる 5, 6人が続々と入室 静寂、笑い 	<ul style="list-style-type: none"> 手のひらで制して「後で」と指示(授業の流れを止めないためのパフォーマンス) 前の戸を閉める 松嶋菜々子のCMの話(授業という枠組みの中で、日常生活の話をする→完全に授業の本題には入っていない。移行はゆるやか?)

<観察結果>

授業前、授業後には、様々な儀礼的な行為が見られた。この結果の一部(とりわけ授業前にみられたもの)を上述のヴァルフの視点にそって解釈すれば、どのようになるだろうか。

①決まった身振り、それに対するアレンジは見られるか。

授業開始前、谷村の場合はマイクに触れたり、マイクをコンコンたたいて調節したりというパフォーマンスが、中戸の場合は、腕時計を眺めたり、それをはずして手に持ち変えたりするパフォーマンスが見られた。

これらの行為は何を促すのか。谷村の場合は、授業でしか用いないマイクを試す形という授業開始を告げており、中戸の場合は、授業者が時間を気にかけていることを聴衆に気づかせるという形で時間通りの授業開始が求められていると見ることができる。いわばこれらの行為は、無意識であるにせよ学生が受講者へ移行するのを促す、授業者からの働きかけであるといえよう。

②教室内での学生の動きの時間的、空間的な構成について。

教室を儀礼のパフォーマンスの場として捉え、授業者をパフォーマー（演技者）として捉える場合、教室は劇場、教壇は舞台、座席は客席として、学生は聴衆として捉えることができる。

・京都女子大学

昼休み後の授業のせい、大半の聴衆はすでにチャイムが鳴る直前までに席についている。遅刻者はわずか。縦長の劇場なので、後ろの席、前の席、両端の席という順で埋まり、その結果真ん中の席は空く傾向が見られた。舞台と客席が少し離れている上に、劇場が縦に長いので、一番後ろに座った場合、パフォーマーからほど遠く離れることになり、そのパフォーマンスのリアリティは伝わりにくい。しかしそのことは、パフォーマーが時折舞台を下りて客席を歩き回ることによって補われている。

・大阪大学

半数以上の聴衆が授業前にすでに着席しているが、残りの3分の1はチャイムと同時にかけこみ、遅刻者も数名見られる。①舞台は広いが客席と比較的接近している上に、パフォーマーは板書の時以外は舞台から下り、時には客席を歩き回る。②もともと横長の教室である上に、授業者が学生に後ろ3列に座ることを禁じているため、聴衆は全体的に少し前に乗り出すような形になっている。①、②より、パフォーマンスのリアリティが伝わりやすいといえる。ただ、逆に客席が横に広すぎる場合のデメリットは、特に両端に座る観客にとって、パフォーマーがどちらかの端に移動した場合に、リアリティが損なわれるという点であろう。

③物、衣服について。パフォーマンスで用いられる物は小道具、その際の衣服は衣装として見ることができる。

[授業者がパフォーマーの場合]

・小道具 谷村：マイク、出席カード、感想用紙、黒板消し、配布プリント

中戸：お茶（缶）、腕時計、配布プリント、参考文献、授業用のメモ、感想用紙

・衣装 中戸：上着、袖をまくったシャツ、眼鏡

[学生がパフォーマーの場合]

・小道具 授業で使用：ルーブリーフ、筆記用具、眼鏡、プリント、ファイル、

授業以外で使用：時間割表、鏡、携帯電話、鞆、スケジュール帳、パン、

飲み物（缶、紙コップ）、写真、ガム、本

・衣装 上着、帽子

④授業という制度に従う（あるいは抵抗する）ための儀礼

大学の授業場面では、個人としての学生は、それまでの生活の場や仲間集団から切り離されて、一受講者となる必要がある。観察の結果、授業開始時には学生達の中に意識的にせよ無意識的にせよ、授業という制度に従う（あるいは抵抗して休み時間を引き延す）ための儀礼が見られた。

⑤儀礼の持つ意味について

授業開始時には、ヘネップの分類に依拠すれば、大きく二つの儀礼が観察された。まず一つは、①仲間グループの一員から受講者への移行を遂げるための「通過儀礼」である。この儀礼はさらに細かく三つの儀礼に分けられる。それまでの仲間グループの状態からの分離を表す「分離の儀礼」、仲間グループの状態と受講者の状態が混ざった境界状態にある「過渡儀礼」、受講者の状態となって授業という制度へ統合される「統合儀礼」である。

他方、上述の統合儀礼とは別に、“仲間グループの絆を深めるという意味での「統合儀礼」も見られた。

<考察>

I. 制度側の(大学側の)儀礼

京都女子大学には、長いチャイム風の音楽(1分15秒)があり、大阪大学には、通常の長さのチャイム(15秒)がある。京都女子大学の方がチャイムの音が大きく、学生にも聞こえやすいが、大阪大学では聞こえにくい。昼休み後の授業のためか、全体的に京都女子大学の学生の方が、そもそも着席が早いのであるが、特に一回目の参与観察の際に見られたように、チャイム風音楽が鳴っている間に学生の話声は小さくなり、授業に関係のないもの(時間割表など)が片づけられ、授業に関わるもの(ルーズリーフや筆記用具)が机の上に出され、鳴り終わる頃には静寂が訪れる。それに対して大阪大学では、チャイムの音の長さが短い上、音も小さいので、学生達の話声に紛れてしまって、余程注意して聞かなければ聞かない。

リーチはその著作の中で、人為的な音が境界をしるす働きを重視している。彼によれば、太鼓を打ったり、角笛を吹いたり、シンバルや拳銃、爆竹や鐘を鳴らしたりすることは「時間や空間の境界をしるしづける」ものとして規則的に用いられるが、その境界は物理的なだけでなく、「形而上学的」でもある⁶⁾。例えば、ラッパの点呼、鐘のうち鳴らしは一日の時間をしるし、トランペットのファンファーレは重要人物の入場をしるしづける。また、号砲と爆竹は特に葬式の行列、結婚式をしるし、雷は「神の声」を表す⁷⁾。つまり彼によれば、ある特定の音は聖なるものを示すのである⁸⁾。

このように考えれば、単純化して言うと、京都女子大学の場合の方が、聖の世界が長く、それによって移行を促す効果も大きいということになるのではないだろうか。

II. 授業者の側の儀礼

[挨拶]

表現の違いはあるが、両者とも授業の第一声は挨拶である。

青木によれば、挨拶とは、人と人との相互作用の始めと終わりを画する境界的な局面であり、交渉のない状態から、交渉や対話への移行を円滑に、また逆にそれまで続いた交渉、対話を円滑に終息させ、継続的な関係の設立、維持に支障がないようにするためのものである⁹⁾。この青木の考えに従えば、挨拶は、ヘネップによる三つの儀礼のうち、ある状態から別の状態へと移行する途上にある「過渡儀礼」であると考えられる。授業者は、挨拶によって、休憩時間の対話のない状態から授業時間の対話の状態へと移行を遂げるのである。

しかしヘネップ自身は、挨拶を統合儀礼の範疇に入れている。挨拶は、「異人が家に住んでいるものあるいはそこに居合わせたものとの程度親しいかによって異なる」ものの、「要するに異人は何らかのやり方で、そのときだけにせよ出会った人々に自分を同一化する」という¹⁰⁾。ヘネップの言う「異人」がここでの授業者、彼の言う「そこに居合わせたもの」がここでの受講者であると考えれば、挨拶は、授業者が授業を始めるための儀礼というよりも、授業者が学生の共同体の方に同一化する儀礼であるという解釈が見えてくる。

さて、挨拶のパフォーマンスについてであるが、両者の挨拶を見ていて、まずはパフォーマーの声が観客に届いていることが儀礼を成り立たせるための条件であることが分かった。これは言ってみれば当然のことではあるが、一回目の谷村の参与観察で、マイクの接触が悪いために挨拶の声が後ろまで届かず、後ろで学生の会話が続けていたことがあった。これは、儀礼の遂行が不完全であることを示しており、逆に言えば、「パフォーマーの声の届く範囲=儀礼の成立する範囲」ということになる。まずは声が行き届いていること、さらに肉声(中戸)であれば、よりリアリティーも増すだろう。

[感想用紙の返却]

また、両者とも、その前の授業で学生に書いてもらった感想用紙を返却することが、休憩時間からの分離儀礼、あるいは休憩時間から授業時間への過渡儀礼として機能している場合があり、その際、感想用紙は儀礼の小道具として扱われている。

授業の象徴である感想用紙を授業前に返却するということは、完全には休み時間から分離させることは

できないにせよ、少なくとも、授業の始まる前の時点で学生に授業の始まりを意識させるという効果がある。あるいは、参与観察では受講者が前回の感想を授業前に読むグループが見られたが、この姿勢を授業に臨む姿勢であると見れば、ここでは休憩時間から授業時間への過渡儀礼が行われていると言うこともできる。彼ら（彼女ら）は、前回の授業内容や自ら考えたことを思い出すことによって、その延長にあるこれから始まる授業へと取り込まれるのである。彼らは、休み時間でも、授業時間でもない、あいまいな境界上にいるのである。

他方、感想用紙の返却は、仲間グループの絆を深めるという意味での「統合儀礼」としても機能している。観察の結果、あるグループが他の学生の名前を呼んで感想用紙を返却したり、グループの一人が同じグループの友人の感想用紙まで取りに行ったりする光景がみられた。この場合の感想用紙は、授業への通過儀礼のための小道具としてよりも、仲間グループの統合儀礼の小道具として機能している。

さらに、感想用紙がこれらとは全く違った目的で使用される様子も見られた。それは、急いで入室してきた学生が、感想用紙でばたばたと顔を仰ぐというパフォーマンスである。その行為は偶発的なもので儀礼とは言えないものの、その隣の学生にも広がり、ここには模倣を通して共同体が形成される様子を見ることができるといえる。

〔5〕 授業者へのアンケートについて

授業者へのアンケートは、20代3名、30代13名、40代14名、50代12名、60代7名の計49名の大学での授業経験者に、無記名、自由記述を伴う形で実施した。その際、担当授業のうち、受講生が40人以上で講義形式のものについて回答を求めた。資料Ⅱは、次のA～Fまでの質問6項目について、自由記述で回答があったもののうち、意味の重複したものを除いた抜粋である。（それぞれの回答を分類したく〈〉は筆者による。）

- A あなたはどのように授業をはじめますか。
- B 授業開始時に学生が騒がしい場合はどうしますか。
- C どのような雰囲気作りを心がけていますか。そのために何かしていることはありますか。
- D 授業中、学生の注目を集めようとするときは何らかの行為（パフォーマンス）をしますか。
- E あなたが教壇に立つとき、身なりについて気遣っていることはありますか。それは何ですか。理由とともにお書き下さい。
- F あなたが授業中、用いる小物（例 指示棒）はありますか。それは何ですか。用いる理由は何ですか。

これらの質問項目について、多様な回答が寄せられた。とくに、「パフォーマンス」、「身なり」、「小物」に関する記述には、それぞれの授業観が表れているものも多く、大変興味深い。また、Cの雰囲気作りについては、とくに自由記述の量も多かったが、授業者の言葉のかけ方、教室での立ち位置および動き方など、かなり自覚的にパフォーマンスしていることが伺える記述も多く、それが「儀礼」とであるという意識はなくても、教師の言葉や身体に関し、授業者にはある一定の型において、暗黙の儀礼ができあがっていることも予想させられる。ある授業がもつ雰囲気は、授業者の働きかけによって形成されると同時に、当然のことながら学生たちのあり方によっても形成される。多くの授業者が雰囲気作りに関して「雄弁」であるのはなぜか。それは授業が、授業者そして学生にとって達成感を得られるものであるのか、それとも徒勞と感じられてしまうのか、授業という場がもつ雰囲気に強く結びついていることを日々の授業実践の中で実感しているからであるだろう。

〔資料Ⅱ〕

儀礼アンケート自由記述抜粋

A あなたはどのように授業を始めますか。

<挨拶から>

- ・「こんにちは」と挨拶する
- ・「皆さん、おはようございます。」午後は「皆さん、こんにちは」と挨拶をする。その次に、当該授業科目について（およびそれ以外のことについても）「何か質問はないか」ときく。
- ・挨拶をして時事問題（教育についての）などに触れてから本論に入る。
- ・こちらから挨拶する。そのままに帽子やコートを脱がせる。
- ・挨拶をし、出席を取ってから入る。
- ・「おはようございます」と挨拶する。イントロダクション、そして授業に入る。
- ・「こんばんは」といいながら頭を下げる。次に連絡事項を言う。そして授業を始める。
- ・挨拶。教室の状態を確認（暑い、寒い）
- ・枕の挨拶、ちょっとした逸話等をまず入れます。最近のトピック

<間があって挨拶>

- ・少し間をおき（その日に使う資料をそろえたりマイクの調子を確認したりしつつ）、その後「こんにちは」と挨拶し、先週はなにをやったかをおさらいする。
 - ・チャイムの前に、前回の感想を返却。教室の前で学生と雑談することもあるが、チャイムがなるとマイクを使って「(あらためて) こんにちは」といって授業に入る。
- <授業開始宣言から>
- ・「それでは授業を始めます」といってから、先週の復習をする。
 - ・「でははじめます」というようなことを一言だけいって開始する。
 - ・教育に関する最近の話題などに少し触れることも多い。「はい、それでははじめましょう」と声をかける。

<前回の復習、その日の授業予定から>

- ・前回までの授業内容を要約して後、今日の授業の主題について触れてから開始する。時に、今日の授業主題の学問的位置づけについて話すこともある。
- ・前時に提出してもらった質問（出席表の裏に書く指示）に答えることを授業の導入にしている。
- ・復習から
- ・前回の復習または毎回レポートの中からフィードバックに値するものを読む

<間をみて>

- ・教壇に立って、30秒位、間をおいて、学生が静かになったところで、すぐに授業に入る。
- ・前回の授業の終わりに書いてもらった学生の意見をそのままプリントしたものを配布することから新しい授業に入ることが比較的多い。
- ・その時々、学生の顔、疲れ具合、等々を観察し、教室全体の一つの人格とみなして、その日、そのときにふさわしく、導入する。その後は前回のreview 今回の話につなげる。

<授業準備から>

- ・授業に入るための設営をすることから始める。
- ・壇上（階段つきの大きなもの）に上り、鞆の中から配布資料を取り出す。下に下りて、資料（前回かいてもらった学生からのコメントを抜粋したもの）を配布する。資料が後ろの席まで回る間にマイクの電源を入れ、授業に入る準備をする。資料が全員に行き届いているか確認し、足りない分は隣の列からももらうようになどの指示をする。（ここで初めて言葉を発します）前回の授業内容を簡単に説明し、資料に記載されているコメントを紹介したり、それらについてこちらがコメントをしたりする。今回の授業に入る。

<すぐに授業内容へ>

- ・何も言わず、黒板に当日の問題を列挙する
- ・すぐに授業に入る

B 授業開始時に学生が騒がしい場合はどうしますか。

- ・資料を配ったり、板書をしたりして待つ。
- ・「いいですか、始めますよ」といった声をかける。
- ・毎回の授業が真剣勝負で次回以降そのようなことがおこらない関係を築く。
- ・話をしている学生に何でもいから質問するとすぐにやむ
- ・学生を引きつける話をしてから始める。
- ・たいていは静かになるまで待ちますが、すぐに静かにして欲しいときはまず注意します。また、しばらく様子を見て静かにならない場合も、注意してから始めます。
- ・「ヤカマシ！」とやや大声でとがめた後、lectureは複数であるのだから、単数の論理を持ち込むのは一人前と見なせたいとコメントする。しかる後、それでも従わない学生は、緑のない存在として退出しなさいと告げる。お互いのためにも、その方がbetterだからである。
- ・「えーか」と注意を促す
- ・話している人の近くにいったり、話しかけたり、当てたりする。収まらないときは注意する。
- ・5-10分程度待って、つぎに少し注意して始める。

C どのような雰囲気作りを心がけていますか。そのために何かしていることはありますか。

- ・相互にやり取りができること。教卓ばかりにいないで教室を歩き回る。
- ・ただ聞くだけではなく、こちらから問いを発して、それについて受講生自身が考えるような授業をしようと考えています。授業の途中に2、3回は必ず当てて、何でもいから応えさせるようにしています。学生がお客様の授業を聞かないように、というのは結構大事にしています。
- ・あまりとげとげしい雰囲気を作りたくないので、私語などに対する注意もそんなに怒ったようにはしていない。また、興味をもってもらいたい（または興味を失ってもらいたくない）ので、いろいろなトピック（時事的なもの関連付ける、大学生が興味を持ちそうなネタ（古いなど）を入れるようにしている
- ・授業の冒頭に関心を引く話題から始める。自由に発言できる雰囲気を作る（どのような意見もまず受け入れてから、こちらの意見を述べる）
- ・人数が多くなると、一対一の授業、双方向の授業は難しくなるため（授業生数：80人）、学生が自分の頭の中で、色々と考えをめぐらすことができるような発問をしたり、具体例を出したりする。リラックスして学びに集中でき、かつ内容的にも濃い授業
- ・私語厳禁で臨む（初回に注意すると以後、私語はない）哲学の話だけだと重苦しいので、ときどき話題を変える。
- ・いかにも「教育学」「教職課程」らしくないように。たとえば机に腰掛けて話すとか。
- ・眠らないように板書は多めに。
- ・主体性、自主性、それから学生間の関係性を引き出すために、学生の意見をなるべく聞くようにしている。
- ・私語は注意するよう心がけている。無断で立ち歩いたりすることは（許可なしに）禁ずる（最初の授業で）
- ・表情を豊かにしようと努めている。学生さんが潜在的に望んでいる人生を語るようにしている（愛情観、人生観etc）。
- ・学生が意見を言いやすい雰囲気作り。授業の中で自分自身の体験談を話す、コメント用紙を配布し、思ったことを自由に書いてもらう、分からないことがあれば気軽に質問するよう伝える、など。「雰囲気作り」とは少しずれるかもしれませんが、授業の内容と特徴、授業内容に反応してつらくなってしまいう学生が時々あるので、授業自体が重くならないよう、また偏った受け止め方をされないよう、気をつけています。
- ・教員自身が明るくふるまう。私語には、厳しく叱責する。
- ・学生が授業に集中すること。授業の狙いやポイント等について学生に徹底し、よく理解させる。講義授業においても、できるだけ学生に問いを投げかけ、考えさせるように仕向けている。ときどきユーモアを交える。
- ・どんどん発言させる。ワイヤレスマイクをもって席を回る。
- ・授業内容に集中できるように、前回の講義の復習や講義の全体像の再確認をおこなう。
- ・この話は面白いのだ、と感じてくれているという雰囲気が欲しいので、面白く、分かりやすく心がけてはいる。
- ・私語等は禁止しているが、なるべく楽しい雰囲気を心がけている。
- ・楽しくて、自然でアットホームな感じ。
- ・学生参加型の授業をすることによって、学生自身が意欲的に授業に臨むようになる。競争原理を活用しつつ、自分たちががんばれば自分の成績アップに直結することを自覚させる。「出席よかった」「欠席したのが残念」だと思わせるような授業を展開する。分かりやすい内容、親しみやすい内容、予備知識がなくてもすぐに溶け込める内容、参加して楽しい内容になるよう努める（ゲームの要素も取り入れる）。多人数授業の持つマイナスイメージを払拭し、むしろ多人数授業のもつ積極面を最大限に活かす。
- ・楽しい。自分で考えること。毎回具体的な事例を紹介する。毎回A4の紙を配布し、課題などを書かせる。4、5人で1グループにして、グループワークをさせる（いつもではない）
- ・和やかな雰囲気と真剣な雰囲気を大切にしたい。今まで関わってきた子どもたちの話を具体的に紹介する。毎回必ず、講義のレジュメ、資料を用意する。
- ・ライブ感覚で学生の表情などを読みとりながら進めている。私の授業では学生は私語がほとんどみられず、静かであるが、ライブ感覚と上に書いたように、活気ある授業の雰囲気作りを心がけている。そのためにまず必要なことは教師が生きていて、生き生きと教えることのように思う。だからそれが独りよがりにならないように、学生の様子に細心の注意を払う。

- ・ 授業者に注意を集中してくれるよう、大教室では特に明確に発話し、適度な身振り手振りを入れることを心がけている。
- ・ 真剣に学ぶ雰囲気。初回の半分以上を使って、この時間を半期間、みんななどのように過ごすかについて雰囲気作りをする。
- ・ 静かになるべきところは静かにし、話し合うべきところは話し合いをさせる。
- ・ 積極的にジョークをいれようとはしますが、いっこうに受けません。
- ・ 講義の一時間目は、5-6人ずつの班をつくり、その班ごとに自己紹介の時間にします。その自己紹介を受けて、第1時間目の残り第2時間目のはじめの時間を使って、黒板の前に立って、班員の紹介をする時間を設ける。自分の名前や特徴が他の受講生に知られていると自覚することは、学生たちの間において意味での緊張感を生むように思われる。さらに、講義期間の初期は、教員が話しているときは集中して静かに聞く、自分たちが活動するときは活発に議論するという具合に、メリハリをつけるよう、努めて注意を促す。そうすると、講義の中段ごろからは、自然とメリハリのついた行動ができるようになってくる。
- ・ ①授業にメリハリをつけるようにしている。講義の中に学生の発表の時間を入れ、私の話を聞くばかりでなく、学生が能動的に意見を言える場を設定している。"加えて、できるだけ学生とのコミュニケーションを深めるため、毎時間授業について短い感想を書かせ、面白い意見については紹介し、コメントするようにしている。
- ・ 楽しくリラックスした雰囲気得意に学習できるように、学生が気軽に質問できるように、対話しながら授業を進めている。
- ・ lectureも一種のパフォーマンス(芝居)であるのだから、起承転結を心がけて、だらけない緊張の保持に努めている。とはいえ、あまりに力んだのでは重苦しくなるので、肩の力は抜くようにしている。つまるところ、カラオケの際の心構えと同じである。
- ・ 一般の話題や時事的話題を導入にしてスムーズに本論に入る。
- ・ 一方通行にならないように出来るだけ授業中の会話に(学生と教師との)気を配る。
- ・ 親密感を増すように心がけている、できるだけ難解な言葉を使わないようにする、事例をできるだけ示すようにする
- ・ 集中して講義を聞くこと、できるだけ明確に問いと答えを与える。
- ・ 他人の学習権を侵害しないことを学生たちに理解してもらっている(それ以外ならすべてを認めている)。
- ・ 自主的に学んでもらいたいので、コミュニケーションを多くとるように心がけています。講義によって異なりますが、電子メールやなんでも帳(「大福帳」)を用いて、質問や意見を活発に書いてもらえるようにしています。返信をしっかりとしていけば、少しずつ質問などは増えていきますし、自分で興味を持って学んでもらえると思っております。

D 授業中、学生の注目を集めようとするときは何らかの行為(パフォーマンス)をしますか。

- ・ まず、一呼吸おく(少し沈黙する)。その後、ゆっくりしゃべる。
- ・ 大きな声で話す。
- ・ 具体的な例や体験談、実感などを話す。
- ・ だまってじっと学生をにらむ(ほほえむ)
- ・ 黒板をたたくことはあります。
- ・ 机間を歩く。手振り身振りを入れる。
- ・ 口調を変える。学生側に近寄る。
- ・ 両手をたたく。「はい、注目して」と多少大きな声を出して、手を振る。
- ・ 重要なことを話すからよく聞け!黒板をたたいて学生の注意を促す。
- ・ ゲームの手法を用いる。トリック・クエスチョンをする。
- ・ 内容に関連づけた雑談で、注意を引く。
- ・ ワイヤレスなので、机間まで行ったり、その学生に適宜に質問する。或いは学生にマイクで発言させる。
- ・ (注目を集めるのは)不必要
- ・ 「はい、ここは注目してくださいね」と言葉で注目を集めます。あと、若干の身振りは入っています(手を挙げて注目を促す)
- ・ 少し大きめの声で、「はい、これから言うことをよく聞いてください」「ちょっとこちらを見てください」などという。
- ・ ゆっくり静かに語り、繰り返す。板書をする。(ポイントを書く)ワイヤレスを使って座席の方に行く。
- ・ 「ここは大切」「ここが今日の一番のポイント」「ここは難しいけど大事だからよく聞いて」などとよく声をかけていると思う。
- ・ 教材提示装置、パワーポイント、ビデオなどの多用による注目

E あなたが教壇に立つとき、身なりについて気遣っていることはありますか。それは何ですか。理由とともに書きください。

<あえていうなら清潔感>

- ・ 汚らしい格好はしないように。学生はよく見ているから。
- ・ とくになが清潔な身なりであることは心がけております。

<普段、常識どおり>

- ・授業だからということで、特別な気遣いをすることはない。ふだん気遣っていることを気づかっているだけです。
- ・気遣っていないが、背広・ネクタイ着用という普段どおりの服装です。
- ・常識にしたがうのみ

<きっちりネクタイ>

- ・ネクタイは締めるようにしている（ふだん本務校ではしめていない）。理由はとくに意識していないが、ほかの先生が皆しめているのと、「自信がない」に教師をやっている」中で、「教師」としてのかっこうを、どうにか、つけようとしていることの現われかもしれない。
- ・スーツ、ネクタイ着用。公の場での教育活動のため。
- ・真面目な服装（ex.ネクタイ着用、暗い色のスーツ）。話題が深刻なものになることが多く、あまり明るい服装だとふさわしくないような気がします。もうひとつの理由は“照れかくし”です。
- ・事務のやり取りをする際、教員であることを分かってもらうため
- ・「若くて頼りない先生だ」と思われないように
- ・可能な限りネクタイ着用（6,7月9月は別として）。スーツスタイルが原則。学生に対するエチケットと思うから。
- ・スーツ+ネクタイで授業、学生にも自分にも授業としてしっかり対応するよう意識づけるため
- ・常にスーツにネクタイ（教育者として当然の儀礼）
- ・あまりラフな服装にならないようにしている。
- ・公演と同じlectureもわれわれ教員には正規の舞台であるのだから、身なりのほうも中身と同じく手抜きはできない。ネクタイ、背広の正装を常としている。
- ・ネクタイ着用を心がけているが、上着はフットワークをよくする為に着用しない。
- ・ネクタイとスーツ。これが日本のアカデミック・コスチュームであると思っているから。ただし授業中は上着を脱ぐことが多い。
- ・基本的にカジュアルなスタイルなので、あまり「遊び」っぽくならないようにしている。
- ・まだ若いということもありますし、基本的にスーツ・ネクタイと着用しています。

<機能重視>

- ・動きやすく、汚れてもよく、清潔感のあるもの
- ・チョークがついてもいいような服、動きやすい服。

<メッセージや自己表現>

- ・これまで小・中・高での「教師」イメージ、それから大学「教師」イメージになるべく沿わないようにする。
- ・話題づくり（同じ服をできるだけ着ない。パステルカラー等のシャツ）
- ・服装はすべて（ベルト・靴・ハンカチも含む）に気を配る。原則として同じ服は着用しない。（ネクタイも）学生にマナーをうるさく注意する関係で、自分が範を示す必要がある。言葉遣いも同様。
- ・清潔な服装を心がけている。眠そうにならないようにしている（一講目なので）
- ・さっぱりした服装（いつもネクタイとは限らないが）、服装なども自己表現の一つの方法だと思うから
- ・服装はよい雰囲気作りとしてとても重要だから

<気分重視>

- ・気遣っていない。その日の気分で生き生きと生のまま授業にのぞみたいので。
- ・講義をする気分を高めるため

F あなたが授業中、用いる小物（例 指示棒）はありますか。それは何ですか。用いる理由は何ですか。

- ・OHP
- ・指示棒、チョーク
- ・実物投影機
- ・本（読んで欲しい本の実物）
- ・マイク（障害のため声が分かりにくく、小さいための補装具）
- ・教材としてビデオ等
- ・ワイヤレスマイク・有線マイクとアンプ・大きい教室で、いろいろな場所で学生が発言する場合
- ・チーム名を示す大きめのネーム立て・・・チーム単位で授業に参加させるため
- ・小物とは性格は異なりますが、院生をTAとして使っています。
- ・その時間にかかわる事物を見せたりする（人形、試薬、実験機材など）。
- ・模造紙－ディスカッションして中身をグループでまとめて報告する（60人くらいの授業で）
- ・ビデオ－部分的に活用して問題への意識を高める
- ・プレゼンのレーザービーム
- ・パワーポイント
- ・パソコン
- ・授業に関する具体物（小物）
- ・フラッシュカード（マグネット付）コミュニケーションの効率化のため
- ・小物？（授業は講義で学生を引きつけるもの）
- ・自分の身体以外の小物を用いるのは舞台上に立つ役者として、邪道に近いのではないか。本当の芸人は、芸そのもので聴衆をひきつけるわけで、それを芸以外の要素に頼るようでは、先が見えているのではないだろうか。われわれ教員も一流の舞台役者から多くを学ばなくてはならないだろう。
- ・そういうことを考えたことがなかった。指示棒などで示すようなvisualな展開をしていないのだと思う。

〔6〕おわりに

ヴルフの言う儀礼とは、日常的な相互行為であり、一定の型が繰り返されるものの、決して固定したものではない。儀礼にとっては、一定の型が場に応じて実演されることが重要な役割を果たすのであり、逆に儀礼がそのパフォーマンスに基づいているとすら言えるのである。とりわけ、ヴルフは日常生活に見られる移行の段階に着目し、その際に引き起こされる通過儀礼を観察しようとしている。彼の手法は、我々が普段、意識しないで行う儀礼を意識化させるものであり、教育者がこのような視点に気づくことによって逆に学生の移行をスムーズにする手助けも可能となるように思われる。今後は、観察結果をより綿密に分析し、教育者側の儀礼に対して学生はどのように対応するのか、また、教育者側の儀礼は学生が自ら作り出す儀礼とどのように関わっているのかということをも明らかにできればと考える。

<注>

- 1) これについてはすでに人類学者、タムバイア (S. J. Tambiah) は、儀礼が一回ごとに必ずしも同じではなく、儀礼の成否の鍵を握るのはむしろ、一定の型にその都度加えられるアレンジであることを指摘している。
- 2) 文化人類学者、ファン・ヘネップ (A. von Genepp) の通過儀礼研究によれば、「通過儀礼」とは、誕生、成人、結婚、死といった人生の節目を平安に通過するために行われる儀礼を指す。しかし、七五三や成年式など、個人の成長過程に行われる儀礼のみが通過儀礼なのではなく、ある場所から他の場所への移動、ある共同体から他の共同体への移行に際して行われる儀礼も通過儀礼である。
- 3) 文化人類学者、ターナー (V. Turner) はヘネップから、「liminair” (敷居) という概念を受け継ぎ、それを移行段階 (ヘネップの言う「過渡儀礼」) にみられる重要な特徴として、「境界性」という概念へ展開させた。この語は、それまでの属性はもはやないものの新たな属性がまだ付与されていない、「どっちつかず」の「あいまいで不確定な」状態である。つまり「境界にある人間 (敷居の上の人たち) の属性」を「境界性」というのである。
- 4) すでに社会学者、ゴッフマン (E. Goffman) と社会心理学者、ヴェレンドルフ (F. Wellendorf) は、制度に対して仲間集団ができることを「制度に抵抗する儀礼 (Widerstandsrituale)」として捉え、それに加えて人類学者、ベイトソン (G. Bateson) は、仲間集団にみられる「制度に従う (institutionsaffirmativ) 儀礼」を指摘した。
- 5) 授業者のこの指示は、学生を前の列に座らせることによって、気持ちの上でも授業に対する積極性が求められると読むことができる。
- 6) リーチ 青木保、宮坂敬造訳『文化とコミュニケーション』紀ノ國屋書店 1981 p. 131-132.
- 7) リーチ 前掲書 同頁。
- 8) リーチ 前掲書 同頁。
- 9) 青木保『儀礼の象徴性』岩波書店 1984
- 10) ヘネップ 綾部恒雄、綾部裕子訳『通過儀礼』弘文堂 1995 p. 27.

<参考文献>

Turner, V., *The Ritual Process, Structure and Anti-structure*, Chicago, Aldine, 1969.

(富倉光雄訳『儀礼の過程』思索社 1976)

Van Gennep, A., *Les rites de passage*, Emile Nourry, 1909. (綾部恒雄、綾部裕子訳『通過儀礼』弘文堂 1995)

Wulf, Ch., u. a., *Das Soziale als Ritual, zur performativen Bildung von Gemeinschaften*, Leske+Budrich, Opladen, 2001.

Wulf, Ch., Zifas, J., *Die performative Bildung von Gemeinschaften. Zur Hervorbringung des Sozialen in ritualen und Ritualisierungen*, In: Paragrana. Internationale Zeitschrift für Historische Anthropologie 1, 2001, S. 93-116.

Consideration to the Ritual Performance as the Lecture Starts

TAKAMATSU Midori

TANIMURA Chie

NAKATO Yoshio

In this paper we focus on the analysis method developed by Wulf (Wulf, Christoph 1944~). Wulf applied the concept of ritual which had been derived from anthropology to the field of pedagogy in order to analyze on the process of socialization, especially in primary school. We also try to apply his idea to the field of higher education.

His concept of ritual means something necessary for human beings to form community and it also means the reiteration of interplay. The mode of interaction is not considered as a fixed one and it is clear that interactions are performed in various forms depending on the circumstances. For ritual, performing itself is necessary for accomplishment.

Wulf pays attention to the phases of passage in daily school life. A child, for example, as a member of peer group must change himself or herself into a child as a pupil as he or she attends the class. Wulf regards such small changes as "ritual of passage."

By applying his method we can find out the small rituals which a person performs unintentionally in daily life and then we also might be able to help students and teachers to go through the phases of passage smoothly in daily school life.

We report the result of our research in university classrooms to highlight some small rites of passage experienced by both students and teachers.